

最近、現代トルコに関する日本人若手研究者の活躍が目覚ましい。特に国内政治や外交、安全保障研究など社会科学分野での研究の躍進が著しい。本書もそうした若手による研究成果のひとつである。

本書は政治エリートの出身校や職業などの経歴を分析し、それに基づいてケマル・アタチュルク死去以降のトルコの政党政治の変遷を追跡したものである。本書でいう政治エリートとは国会議員を意味しており、その中でも閣僚や党の幹部会メンバーについては、トップ・エリートとしてより詳しい分析がなされている。

共和人民党の一党支配体制時代、および複数政党制が導入されてから軍が最初のクーデターを起こす1960年までの第一共和制時代については、主として先行研究に依拠している。しかし、民政移管から軍が再度クーデターを起こす1980年までの第二共和制時代と、再び民政に戻った1983年から現代までの第三共和制時代については、一次資料に基づいて国会議員の経歴が検討されている。まさに実証的な研究であり、それぞれの時代における各政党の変遷と政治エリートの出自との関係が分析されていて、大変興味深い。例えば軍出身者は予想外に少ないこと、官僚出身や法曹関係者が一定の割合を占めていること、トルコ経済が活発になるにつれ経済人など民間出身者が半数前後にのぼっていることなどが明らかにされている。

本書では当然、政治エリートとイスラームとの関係についての分析もなされている。同国では1960年代から、支持基盤拡大のため多くの政党がイスラーム的な価値観を重視する立場をとり始め、それがイスラーム政党の出現や躍進に結びついたとの指摘は以前からあった。本書によれば実際、宗教関係者（宗務庁などの公務員やその傘下の導師・説教師、宗教教育担当教師など）が国会議員に占める割合は第二共和制下で着実に増えている。さらに第三共和制下でイスラーム政党として初めて政権を握った繁栄党ではさらに宗教関係者の割合が増えている。

ただ面白いことに、本書によれば宗教関係者の割合は1990年代をピークに減少傾向にあることだ。2002年以来政権を握っている公正発展党選出の国会議員に占める宗教関係者の割合はさらに減少している。トップ・エリートである閣僚や党幹部会メンバーにも、宗教関係者はほとんどいない。公正発展党はよく「イスラーム政党」「イスラーム主義政党」と形容される。その側面を持っていることは事実だが、「イスラーム政党」だけでは括りきれない多様性を持っている政党であることが、本書によって確認できる。

このように本書はトルコの政党政治を政治エリートの経歴から分析しているのだが、読み進めると新たな疑問が出てくる。例えば1980年代から90年代初頭にかけて母国党を率いたトゥルグット・オザルや現在の公正発展党党首レジェップ・タイップ・エルドアンらは、閣僚などのトップ・エリートを側近グループから抜擢したという。その背景として本書は「利益と支援を交換する不平等なパートナーによる二者間のパトロン関係」を指摘している。では、どのようにして利益と支援の交換がなされ、それが党首の強い権限に結びついたのだろうか。もっと具体的に知りたいところだ。

さらに国会議員候補がどのようにして選ばれるのかも、政治エリートのリクルート・システムの解明という視点から次の研究として興味深いテーマではないだろうか。公正発展党が政権を握って以降の2回の選挙（2007、2011年）ではいずれも、当選議員の半数ないしそれ以上を新人が占めている。90年代でも新人議員が占める割合は比較的高いようだ。合理的に考えれば、新人候補者を擁立すれば、知名度や地盤の関係から当選させるためのコストは高くなる。にもかかわらず新人が多いことは、トルコのリクルート・システムに何か特異な点があるのだろうか。

本書を出発点に筆者が、現代トルコ政治の研究の地平をこれからさらに広げていくことを期待したい。